

JICA 教師海外研修 学習指導案・授業実践報告書

【実践者】

氏名	澤野 裕香	学校名	埼玉県坂戸市立浅羽野小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	4年2組（25名）
実践年月日もしくは期間（時数）	2021年1月 ～ 3月（10時間）		

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：総合的な学習の時間	
2. 単元(活動)名：「国際理解 日本と外国のつながり」	
3. 授業テーマ（タイトル）と単元目標 授業テーマ：「日本と外国のつながり」 単元目標：日本と他国の共生とよりよい社会づくりのために、調べ学習を通して、SDGsに対する取り組みとその工夫や努力、人々の思いに気付き、「自分にできることは何か」の視点をもって学んだことを自らの生活や行動に生かそうとする。 関連する学習指導要領上の目標：(3)探求的な学習に主体的・協働的に取り組むとともに、互いのよさを生かしながら、積極的に社会に参画しようとする態度を養う。	
□4. 単元の評価基準	① 知識及び技能 ○外国やSDGsについて正しく理解する。 ○課題に対して情報を収集する。
	②思考力、判断力、表現力等 ○課題を見出すことができる。 ○調べ学習を通して、得た情報を整理・分析して表現することができる。 ○自分なりの考えをもつことができる。
	③学びに向かう力、人間性等 ○外国やSDGsについて主体的に学習に取り組むことができる。 ○「自分にできることは何か」という視点をもって学習に取り組み、自分の思いや考えを深めようとする。
5. 単元設定の理由・単元の意義 (児童/生徒観、教材観、指導観)	<p>【単元設定の理由】 【単元の意義】</p> <p>本単元では、自分が興味を持った国について主体的に調べたり、日本と外国の現状からSDGsの視点から課題を見出し考えたりしながら、国際理解を深めることのできる教材である。児童一人一人が、様々な国の現状や課題に思いを寄せ、自分にできることはなにか考えられるようにしていきたい。</p> <p>【児童/生徒観】</p> <p>第四学年の児童は、フィリピンや中国にルーツを持つ児童がいたことから、国籍に対する考え方が柔軟である。また、二学期までに、車いすや白杖、盲導犬ふれあい体験などを通して福祉の学習を積み重ねてきた。誰もが公正な社会づくりについて、関心を持っている。しかし、自分になにができるのか考えたり、行動に移したりすることができる児童は多くない。</p> <p>【指導観】</p> <p>グローバル化が進む今日、国際的な関わりが今後さらに増すことが予想される。小学校においても、2020年の学習指導要領の実施に伴い、外国語活動が教科として導入された。</p> <p>児童には、我が国日本が抱える課題に留まらず、さらに視野を広げて国際的な課題を自ら見出し、思いを寄せ、自分になにができるのか考え実行する力を身に付けさせたい。また、学習の過程で、児童が自分とは違う考えを受け入れながら、自分の考えを深めることができるようにしたい。</p>

6. 単元計画 (全 10 時間)				
時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1 3	日本×SDGs	SDGsについて知り、日本にとって最も重要な課題について考えを持つことができるようにする。	① SDGs とは何か ② 食育指導 給食の残飯一日分の写真をもとに、そこから考えられる課題について児童に考えさせる。また、給食で使用した油を再利用して石鹸を作り給食室で使われていることを紹介した。 ③ 「わたしが考える！日本のダイヤモンドランキング」 児童一人で 17 の目標に優先順位を考えさせる。	① ワークシート (参考：私たちが目指す社会 P25) SDGs ロゴマーク ② 給食の残飯と石鹸作りの写真 ③ ワークシート SDGs ロゴシール (JICA より)
4 本時	他国×SDGs	他国にとって最も重要な課題について考えを持つとともに、日本と比べることで、課題を見出すことができるようにする。	④ 「わたしたちが考える！〇〇のダイヤモンドランキング」 ヒントカードの情報を持ち寄り、ジグソー法で考えを深めていく。複数の国を取り扱うことで、国によって重要な目標は違うことに気付くことができるようにする。	④ ワークシート SDGs ロゴマーク ヒントカード (参考：共につくる私たちの未来) あいさつカード
5 3	他国について調べよう	自分が興味をもった国について調べ学習を行い、他国の文化や課題についてまとめ発表することができるようにする。	⑤～⑦ 調べたい国を決め、その国の言語、文化、SDGs に対する取り組みなどについて調べコンピュータを用いてまとめる。 ⑧～⑩ 調べた国について発表会を行う。発表を通して、様々な国に対しての関心を高めるとともに、日本のよさや課題を再認識できるようにする。	

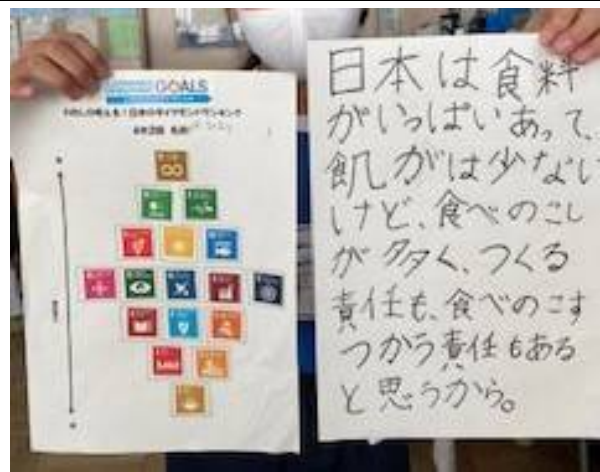
7. 本時の展開 (時間目)				
本時のねらい：外国の抱える社会情勢について正しく理解し、課題意識を持ったことを交流したり、それについてよりよい社会となるように意見を出し合ったりすることで、自分の考えを深めることができる。				
過程時間	教員の働きかけ 発問および学習活動 指導形態	指導上の留意点 (支援)	資料 (教材)	
導入 (5分)	1 アイスブレイキング あいさつカードを用いてグループ分けを行う。	◇自分から多くの友達と関わり、同じ国 (言語) の仲間を見つけられるようにする。	あいさつカード	
つかむ (7分)	2 「わたしが考える！日本のダイヤモンドランキング」で、自分が最も優先順位が高いと考えた目標をグループ内で発表し合う。 3 本時の課題を知る。	◇自分の考えを持ち、全員が発表できるようにする。 ◇自分とは違う考えに気付くことができるようにする。	ワークシート (既習)	
ダイヤモンドランキングを考えよう。				

活動する (25分)	<p>4 課題に対する解決方法を考えよう。</p> <p>①グループによる学び合い ジグソー法を用いて、外国のダイヤモンドランキングを考える。</p> <p>②グループ発表 グループで考えた最も優先順位の高い目標を発表する。</p>	<p>◇少人数グループで話し合わせ、全員が意見を出し合い、考えを深められるようにする。</p> <p>◇発表や質問から多角的な見方、考え方に気付くことができるようにする。</p> <p>◇友達の考えを聞いて、他国の抱える課題に気付いたり、新たな疑問を見出したりすることができるようにする。</p>	<p>ワークシート SDGs ロゴマーク ヒントカード</p>
振り返る (8分)	<p>5 本時の振り返りをする。 新たな課題を提示し、自分にできることは何か考える。</p>	<p>☆本時の発表を踏まえ、新たな課題に対する考えを持ち、自分事として捉えることができる。</p>	
<p>8. 評価規準に基づく本時の評価方法 本時の発表を踏まえ、新たな課題に対する考えを持ち、自分事として捉えることができる。 (観察・ワークシート・発表)</p>			
<p>9. 学習方法及び外部との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えを持ちながらグループ活動を行ったことで、多様な見方・考え方に気付くことができた。 ・前時に日本のダイヤモンドランキングを考えたことで、日本と他国の課題の違いに目を向けることができた。 ・日本人学校（ケニア・フィリピン）に勤務した教員による講話を実施する。 			
<p>10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組： 校内における研究授業の実施</p>			

【自己評価】

<p>11. 苦労した点</p>	<p>国際理解・開発教育の学習環境が整っておらず、児童が予備知識のないSDGsについて、現状の学習過程の中にどのように組み込んでいけるか考えさせられた。授業実践にあたり、直面した課題は①教材の作成と②他の教職員からの理解であった。</p>
<p>12. 改善点</p>	<p>研究授業で取り上げた国は、いずれも開発途上国であった。児童生徒の興味・関心が高い国を取り上げてよかった。理由としては、開発途上国に対して「貧乏でかわいそう」「行きたくない」などといった感情で終わることのないようにしたい。そのために、ヒントカード（児童に示す情報）の工夫が必要であると感じた。</p>
<p>13. 成果が出た点</p>	<p>児童一人一人が日本のダイヤモンドランキングを作成し、日本が抱える一番の課題を発表した。それにより、児童は考え方に違いがあることに気付くことができた。さらに、日本が恵まれていることを再認識した後に、途上国のダイヤモンドランキングを作成したことで、17の目標を『自分事』として捉えることができた。実践を通して、児童は日本の資源は世界の資源であることを学んだ。</p>

14. 学びの軌跡 (児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど)



←私が考える日本のダイアモンドランキング

↓私たちが考える〇〇のダイアモンドランキング (ブラジル・ミャンマー)



15. 授業者による自由記述

今回、この研修に参加させていただいたことにより、参加前の私では実践できなかった授業を行うことができた。国際理解・開発教育を行うにあたり、どのように実践していくか、校内の体制はもちろん、教員の意識の差や教材の不足など、様々な見えない壁を感じた。しかしそれらは、少し前の私自身であるのだと恥ずかしくもあった。

今年度は実際に現地へ足を運ぶことが叶わなかったが、同じ志を持つ仲間と、前年度までの参加者、JICAの職員の皆様と学び、考え、意見を交わす中で、知識の広がりを感じ、授業に還元することができた。未来を担う子どもたちが自他のよさを認め合い、協働してよりよい社会を築くことができるよう、その素地を養う教育現場で、教員として彼らに伝えたいことを今一度考えるきっかけとなった。

参考資料：『共につくる私たちの未来 SDGs から「持続可能な社会の創り手」への一步を』
 JICA 地球ひろば
 『私たちが目指す世界 子どものための「持続可能な開発目標 (SDGs)」
 ～2030年までの17の目標～』
 独立行政法人国際協力機構